

# 認識的阻却要因の分類

野上志学 (Shigaku Nogami)

三重大学人文学部

認識的阻却要因 (epistemic defeater) とは、大まかに言って、主体の信念の正当化ないし知識を一定程度毀損する要因である。この阻却要因については、その導入の当初から、反対する (opposing, rebutting) 要因と掘り崩しの (undermining) 要因の (少なくとも) 2 種類に分類されてきた (Pollock, John, 1970. 'The Structure of Epistemic Justification', *American Philosophical Quarterly*, monograph series, 4:62–78). スタンドアードな認識論においては (一定程度形式的な枠組みで述べられることもあるが) これらの分類は、基本的には典型的な事例をそれぞれに挙げることによってなされてきたと言ってよい。本発表では、おおよそベイズ認識論の枠で、これらの区別を厳密な形で定式化することを目指す。

阻却要因の特徴づけとしては、純粋に確率のみを用いるアプローチもこれまでに提案されてきたが (e.g., Matthew Kotzen, 2019, 'Formal Account of Epistemic Defeat', in *Themes from Klein: Knowledge, Scepticism, and Justification*, Jim Pryor 2013, 'Problems for credulism', in *Seeming and Justification*), 本発表では、因果モデル (Judea Pearl 1900, *Probabilistic Reasoning in Intelligent Systems: Networks of Plausible Inference*, Morgan-Kaufmann; Judea Pearl 2009, *Causality*, 2nd ed., Cambridge University Press) を追加で用いたアプローチを試みる。このアプローチを採用する利点はいくつかある。第 1 に、純確率的な分類は、ある事例において成り立つであろう確率に関する (不) 等式を提案することによってなされるのであるが、そうした事例において確率に関する (不) 等式がなぜ成り立つのかを、因果モデルを用いればより明瞭に理解できるようになる。これは純確率的分析が結果的に正しい分類であってもそうである。第 2 に、純確率的な分類に比べて、因果的なアプローチは因果構造の分類によって (少なくとも単純な事例においては) 包括的であることが保証された分類を与えることができる。第 3 に、既存の研究 (Kotzen, Pryor) が想定しているような単純な事例と複合的事例という区別そのものが、確率的な等式によって与えられるというよりは、因果構造の複雑性において与えられるものである。第 4 に、既存の純確率的なアプローチ (とくに Kotzen の研究) では見逃されていた、阻却要因、とくに反対要因についての重要な分類が因果構造に着目することによって明らかになるからである。